



「子どもの最善の利益」を優先に：

野毛山キリストの教会牧師
野毛山幼稚園長 奈良昌人

3学期のある朝、お父さんと登園してきた年少組の男の子が、ニコニコしながら、「今日はお母さんと会えるんだ！」と、亜樹子先生に言ったそうです。その日は、中学生の体験学習で4人の男子生徒が幼稚園で保育を体験する日でした。男の子のお母さんは、その中学校の教師をされていた、その日は引率兼見学の日だったのです。その日過ごしている中で、お母さんが年少組の部屋の所を通った時、男の子がお母さんを見つけて嬉しそうに手を振ったので、お母さんも手を振り返したのですが、男の子はくるっと友だちの方に行ってしまったそうです。4月の入園当初、「ママ、」と叫びながらあんなに泣いていたわが子が、今は嬉しそうに友だちの方に行ってしまう姿を見て、お母さんは涙ぐんでおられました。幼稚園の友だちや先生との楽しい生活、お母さん（お父さん）がいる安心感、これこそが子どもの育ちと情緒の安定に一番大切なことだと思っています。

2024年一年間に全国で自殺した人は2万人余りと減少した一方で、小中高生

の自殺者は529人で過去最多となりました。小中高生の自殺の原因や動機は、「学校問題」が最も多く、次いで「健康問題」「家庭問題」でした。全国の20市からなる政令指定都市私立幼稚園団体協議会の理事会での話題の中に、この小中高生の自殺の動機とは別に、原因の一つとして、大人は一日8時間の労働なのに、乳幼児は11時間の保育と預かりが標準になっっていることがあるのではないかと議論されているそうです。

松居和先生は著書『ママがいい！』の中で「最近のDVや児童虐待の報道を見るたびに思う。かつて、保育がまだ保育らしく「子どもの最善の利益を優先する」という指針の心が生きていて、園長や主任たちが親を導き、時には叱ることができた頃、どれほど多くのDVや児童虐待が保育の現場で止まっていたか。：『あの園長先生に救われた』という保護者の声をたくさん聞いた。この国のモラルや秩序を保育が支えていた時期が確かにあった。」と言っています。「子ども誰でも通園制度」をはじめとする新たな制度の導入がある中で、様々につくられる制度が本場に「子どもの最善の利益」に資するものになっっているのか、あるいは経済最優先の「保護者の利便性」に留まるものなのか問い続けています。家庭のための子育て支援から、今こそ子ども支援にシフトしなくてはならないのではないのでしょうか。乳幼児は「ママがいい」に決まっています。子どもの最善の利益を優先しなければ、日本の未来は真つ暗闇

先日、教会でホームカミングが礼拝が行われました。今年20才になった第1回卒園来られ、一緒に日曜日の礼拝をささげました。その後、懐かしい顔ぶれでのさやかな昼食会が行われ、自己紹介で一言づつ話していただきました。卒園から14年、卒園生たちの卒園当時の写真と顔を比べながら、誇らしげに現況と未来への抱負を話す姿と内容に喜びと感動を覚えました。この人たちに日本の将来を託せると。保護者の皆さんからも、野毛山幼稚園で過ごした時間は、親子での本当にかけがえない時間であり、わが子とあの時間があつたからこそ今があると、皆さんおっしゃっていました。

卒園するすずらん組さん、幼稚園時代、いい時間を過ごしましたから、胸を張って小学校に行くってください。進級するくみ組、ばら組の子どもたち、私たちは変わらず皆さんと愛情たっぷりに関わっていきます。4月からも楽しい幼稚園を過ごしましょう！

